



国や世代を越える防災教材の開発・実践・普及

1 海外向け防災教材の開発と提供

本研究室とエクアドル共和国

2016年、JICA（国際協力機構）よりエクアドルの防災関係者を対象とした防災講座を委託され、これを契機として本研究室とエクアドルとの交流が始まった。エクアドルは環太平洋火山帯に位置し、地震、津波、火山といった自然災害のリスクを抱えており、洪水や土砂崩れだけでなく、エクアドル・コロンビア地震（1906）では1500名を超える犠牲者があった。2021年度より、これまでの国内で普及を図ってきた防災教材をスペイン語及び英語に翻訳し、エクアドルをはじめとする海外への教材提供を開始した（図1）。

防災紙芝居の開発と提供

本研究室が制作した防災紙芝居『ゆれがきたぞ!!』『みずがくるぞ!!!』は、災害発生時の具体的な行動をさまざまな虫の行動に置き換え、災害時の対処行動について学べるようにしたものである（藤井,2014）。スペイン語版の制作にあたっては、2021年4月よりJICAおよび国際航業株式会社の協力のもと、エクアドルの防災関係者とオンラインで議論を重ねてきた。同年8月にはエクアドル国家危機管理・緊急対応機関にスペイン語版が提供され、現在主要7都市の教育機関に配布されている（図2）。

これらの防災紙芝居の制作にあたっては、研究室でストーリーを考案し、下書きをしたものを、イラストレーターの高山みほ氏の協力を得て完成させた。また、紙芝居の印刷・普及にあたっては、静岡大学防災総合センターより助言及び研究支援をいただいている。



図1：開発したスペイン語版「ゆれがきたぞ!!」



図2：開発した教材を手にする現地担当者



2 世代をつなぐ防災教育プログラム「BOSAIユースアンバサダー」の実践

「伝える防災」の取組

阪神・淡路大震災を契機として、関西圏を中心に防災教育の取り組みが加速し、東日本大震災によって、防災教育は学校における中心的な課題の一つとして全国で見直しと改善が進められてきた。その一方で、高等学校においては防災教育を十分に実施できていない学校が40%にのぼるとされ、小・中学校と比べて取組の遅れが指摘されている(柴田他,2020)。本研究室では2021年度より「伝える防災」の理念を掲げ、静岡県内の高校と連携して、高校生による幼児向け防災講座の実施を指導・支援する「BOSAIユースアンバサダー」プログラムの開発・普及を進めている。

プログラム開発と実践・普及 (BOSAI × ASOBI)

本教育プログラムが目指すのは、大学生から高校生、幼児にわたる防災コミュニティの形成と主体的な防災活動を通じた防災意識の涵養である。本プログラムは、高校生が大学の支援のもとで、みずから防災の内容を織り交ぜた幼児向けの遊び(防災遊び)を考案・実施するところが特色となっている(図1)。2019年度より開始し、現在では静岡県内の七つの高校で導入されている。同プログラムに参加した高校生244名に対して行った事前及び事後にアンケート調査では、参加した生徒の防災意識や学習意欲の向上などが認められ、ハザードマップの確認といった防災行動にもつながっていることが示された(図2)。2022年には書き込み式の副教材やオンライン教材を開発・提供し、防災教育の担い手の育成と裾野の拡大を図っている(図3)。



図3：活動の様子と副教材

専門知



図1：プログラムの概要
出典：上田・藤井・上地，2022

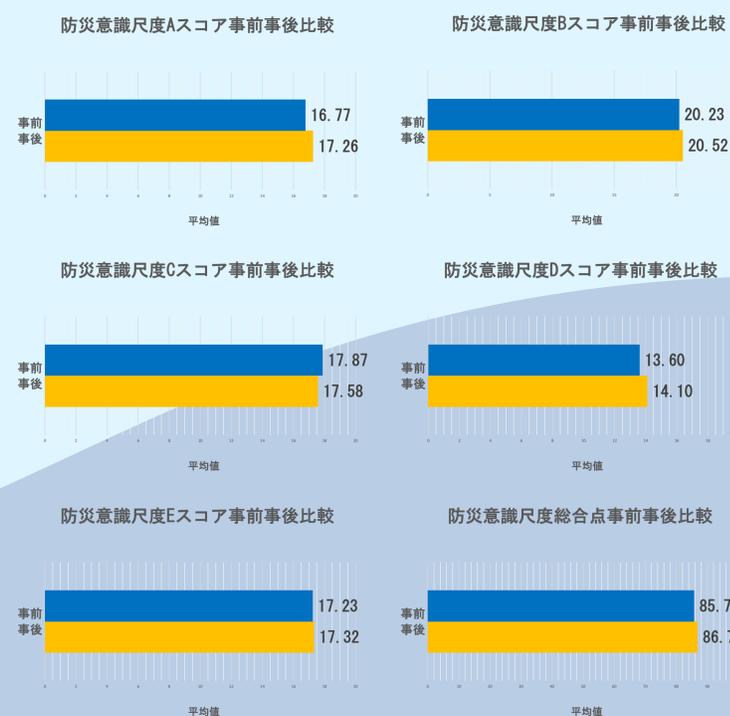


図2：防災意識尺度の事前事後比較
出典：上田・藤井・上地，2022

【参考文献】

- 柴田真裕・田中綾子・船木伸江・前林清和(2020), わが国の学校における防災教育の現状と課題—全国規模アンケート調査の結果をもとに—, 防災教育学研究, Vol.1, No.1, 19-30.
- 鈴木希実・藤井基貴・上地香杜・上田啓瑚(2021), 総合学習における防災教育の導入:地域と連携した「総合的な探究の時間」のカリキュラム開発と指導方法の可能性, 静岡大学教育実践総合センター紀要, Vol.31, 290-299.
- 上田啓瑚・藤井基貴・上地香杜(2022) 「異なる世代をつなぐ防災教育プログラムの開発と効果検証—参加生徒の事前・事後アンケート分析を中心に—」 災害情報(20), 1, pp.147-158